

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.165

2007年2月

山本理事が第1回日中大学学術フォーラムに出席



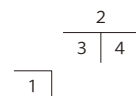
<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

目次

●ニュース	
山本理事が第1回日中大学学術フォーラムに出席	3
豊田事務局長が日本法教育研修センター設立準備のためベトナムハノイを訪問	4
韓国 木浦大学校調査団が研修のため来学	4
近藤教育発達科学研究科助教授と杉山理学研究科教授が日本学術振興会賞を受賞	5
近藤理学研究科長が朝日賞を受賞	5
廣里国際開発研究科教授がベトナム教育訓練省「教育という大義のために」賞を受賞	5
大学における輸出管理体制強化説明会を開催	6
森理学研究科教授の猿橋賞受賞記念講演会を開催	7
産学官連携セミナー「イノベーション創出に向けた産学官連携の新たな展開」を開催	7
舛名大が平野総長を表敬訪問	8
平成18年度学生生活に関する教職員研究会を実施	8
年末キャンパスクリーンを実施	8
大学入試センター試験が実施される	9
●知の先端	
「ながれ」の不安定性が作り出す新たな秩序	10
佐宗章弘（大学院工学研究科教授）	
大脳皮質原基において細胞突起のよじれに依存したバネ様機構が娘細胞の移動を助ける 宮田卓樹（大学院医学系研究科教授）	12
●学生の元気	
平成18年度名古屋大学体育会会長表彰式 受賞者及び受賞団体のことば	14
●キャンパスクローズアップ	
FOREST	16
●部局ニュース	
公開講演・シンポジウム「大学全入時代の高等教育マネジメント」を開催	18
国際シンポジウム「中国における社会経済インフラとビジネス環境」を開催	18
坂田模型50年国際シンポジウムを開催	19
第5回坂田・早川記念レクチャーを開催	19
21世紀 COE プログラム「宇宙と物質の起源：宇宙史の物理学的解読」	20
クリスマスレクチャーズを開催	
21世紀 COE プログラム「物質科学の拠点形成：分子機能の解明と創造」	20
国際会議を開催	
「小林・益川理論」の検証に関する国際研究会を開催	21
第3回東海地区 CSI 事業報告会を開催	21
徹底討論「次の東海地震はどこだ!？」を開催	22
第25、第26回防災アカデミーを開催	22
第2回大学院 FD 研究会を開催	23
平成18年度放射性同位元素等取扱施設安全管理担当教職員研修を開催	23
ICCAE 2006年度第7回オープンセミナーを開催	24
第24回オープンレクチャーを開催	24
第66回博物館特別講演会を開催	25
博物館が「アイルランド音楽へのいざない」コンサートを開催	25
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成18年12月16日～平成19年1月15日	26
●INFORMATION	
平成18年度定年退職教授等の最終講義日程表	28
●イベントカレンダー	30
●ちょっと名大史	
医学部附属病院分院（東門前町時代）	32

山本理事が第1回日中大学学術フォーラムに出席





- 1 第1回日中大学学術フォーラム開会式の様子
- 2 出席者の記念撮影
- 3 本学の取り組みについて発表する山本理事
- 4 山本理事（左）と張榮南京大学副学長（右）

山本理事は、12月8日(金)から10日(日)までの3日間、中国上海市の復旦大学において開催された「第1回日中大学学術フォーラム」に出席しました。

日中大学学術フォーラムは、2006年5月に行われた第4回日中大学学長会議において、北京大学、復旦大学、京都大学、慶応義塾大学の4大学の連名提唱により、日中大学学長会議の枠組みの下で、両国の主要な大学の研究者が学術研究について交流することを目的として発足したものです。

第1回目の本フォーラムでは、「イニシアチブとパートナーシップ-日中大学の新しい使命」をテーマにし、日中両国併せて28の主要大学からの出席がありました。

開会式では、章新勝中国教育部副部长、徐敦信元中国駐日本大使・元外交部副部长、嚴雋琪上海市副市长などから祝辞があり、本フォーラムの提唱者である4大学の学長から基調講演がありました。

8日午後に行われた学長円卓会議では、山本理事が「国際連携によるワールドクラスの研究重点大学をめざして」と題する論文発表を行い、国際交流分野における本学の代表的な取り組みを説明し、日中両国における今後の大学間交流について提言しました。大会全体では、両国間における主要大学の社会的役割、留学生教育などを中心に、活発な議論が交わされました。

豊田事務局長が日本法教育研修センター設立準備のため ベトナム ハノイを訪問

豊田事務局長は、1月6日(土)から9日(火)まで、日本法教育研修センターの開設準備のため、ベトナム ハノイを訪れ、ベトナム司法省、ハノイ国家大学、ハノイ法科大学、在ベトナム日本大使館等を訪問しました。

司法省では、クアン人事局長と会談し、豊田局長が「本学は、これまでウズベキスタン、モンゴルにセンターを開設し、人材育成に協力してきた。ベトナムでも貴省所管のハノイ法科大学内にセンターを開設すべく現在準備を進めており、貴省からの支援に期待している」



タム ハノイ法科大学学長（右）から豊田局長（左）に記念品贈呈



司法省前でクアン人事局長及び本学同窓生と記念撮影

と述べたのに対し、同局長は、「我が省でも多くの貴学法学研究科出身者が、国際局次長を筆頭に活躍している。今回のセンター設置を我々としても大変期待している」旨表明しました。ハノイ法科大学では、タム学長と会談し、「以前より日本語及び日本法を学びたいとの強い要望が学生からあったが、センター設置という本学の長年の夢が実現することになり心から喜んでいる」旨の話がありました。

服部在ベトナム日本国大使との会談では、大使より「ベトナムは日本にとっても非常に重要な国であり、貴学の法整備支援の取り組みに期待している。できる限りの協力をしたい」との言葉があり、中川 JICA 所長も今後の本学との協力を約束しました。同行した文部科学省大臣官房国際課田村補佐も、本学の取り組みの将来的成果について強い期待感を表明しました。

また、本学出身で、現在司法省、科学技術省等中央省庁で活躍中の同窓生らと懇親会を行い、本センター設立について、皆一様に歓迎していました。

今後は、今年9月の本センター開所式に向けて、法政国際教育協力研究センターを中心に、本格的な準備に取り掛かることになります。

韓国 木浦大学校調査団が研修のため来学

12月19日(火)、韓国 木浦大学校の全奎鐘事務局長及び事務局職員併せて16名が本学を訪問し、本部1号館等において国立大学の法人化等についての研修を行いました。

この研修は、同大学校が事務職員研修の一環として、日本における大学行政制度、法人化等を調査・研究させるために行っているもので、研修には、豊田事務局長をはじめ、事務局各部署の主幹、課長補佐、専門員等関係職員が出席しました。

まず、豊田事務局長から、法人化による財務・会計、人

事等における国立大学政策の変遷について説明がありました。続いて、あらかじめ先方から示されていた国立大学法人に関する質問事項に対し、事務局各担当から個別に説明及び回答がありました。また、質疑応答も併せて行われ、国立大学法人の運営の仕組み、大学の予算収入等財政的事項、特に国立大学法人のメリット、人事管理の変化等に関する質問が多く出されました。

その後、同大学校訪問経験者を交え、昼食をとりながら歓談し、野依記念物質科学研究館、国際ナショナルレジデンス、赤崎記念研究館及び附属図書館を見学しました。

同大学校にとっては、国立大学法人について理解を深め、本学にとっては、改めて国立大学法人及び本学の法人運営について再確認できた、非常に有意義な機会となりました。



あいさつする豊田局長



握手する全局長（左）と豊田局長（右）

近藤教育発達科学研究科助教授と杉山理学研究科教授が 日本学術振興会賞を受賞

近藤孝弘教育発達科学研究科助教授と杉山 直理学研究科教授が、第3回（平成18年度）日本学術振興会賞を受賞しました。今回は、415名の被推薦者の内、25名が受賞しました。

本賞は、日本学術振興会が、平成13年3月に閣議決定された第2期科学技術基本計画を踏まえ、優れた研究を行っている若手研究者を見だし、早い段階から顕彰してその研究意欲を高めるとともに、独創的、先駆的な研究を支援することにより、我が国の学術研究の水準を世界のトップレベルへ発展させることを目的に、平成16年度に創設されたもので、両氏の受賞は、「国際関係における歴史教育政策に関する比較研究」（近藤助教授）、「宇宙マイクロ波背

景放射に関する理論的研究」（杉山教授）の成果が評価されたことによるものです。

なお、授賞式は、3月2日（金）、東京都台東区の日本学士院において行われます。

近藤理学研究科長が朝日賞を受賞



授賞式での近藤研究科長

近藤孝男理学研究科長が、2006年度朝日賞を受賞しました。

本賞は、1929（昭和4）年、朝日新聞社の創刊50周年を記念して創設され、人文や自然科学等の分野において優れた業績をあげ、文化、社会の発展に多大な貢献をした個人又は団体に対し贈られる名誉ある賞です。今回は、各界からの推薦をもとに、朝日新聞文化財団と朝日新聞社の選考委員会の厳正な審議により、6名が受賞しました。

受賞理由は、「生物時計の分子機構に関する研究」において、「概日時計」と呼ばれる約24時間の体内時計の仕組みをシアノバクテリアを使って解明し、生物時計を再現することに成功したことによるもので、今後の生命科学に影響を与える研究と期待されています。

なお、授賞式は、1月29日（月）、東京都千代田区の帝国ホテルにおいて行われました。

廣里国際開発研究科教授がベトナム教育訓練省「教育という大義のために」賞を受賞



受賞楯を受けとる廣里教授（左）

廣里恭史国際開発研究科教授が、ベトナム教育訓練省「教育という大義のために」賞を受賞し、11月10日（金）にベトナム、ハノイの教育訓練省で行われた授賞式で、勲章と表彰楯を授与されました。

本賞は、ベトナム教育発展への功績が顕著に認められた者に授与される賞で、外国人に授与されることは極めて稀



「教育という大義のために」勲章

です。受賞の理由は、ベトナムがドイモイ（刷新）政策を進める中、1990年代初頭より対外支援の受け入れを本格的に開始した際に、いち早くアジア開発銀行などの国際機関に働きかけ、今日のベトナム経済社会発展の人的資源面を支える中等教育開発に必要な資金を動員し且つ助言を行ってきたこと、ベトナムの政府関係者や教育分野の研究者との交流を深めてきたことなど、十数年に渡って多大な貢献をしてきたことによるものです。

大学における輸出管理体制強化説明会を開催

大学における輸出管理体制強化説明会が、12月15日(金)、経済学部第2講義室において開催されました。これは、産学官連携推進本部を中心に、経済産業省の協力を得て行われたもので、学外から13名、学内から73名の参加がありました。

まず、中島正登経済産業省安全保障貿易検査官室検査官が「安全保障貿易管理を巡る最近の動向について」と題し、「無防備に機微な貨物や技術を先進国から核兵器等の開発を行っている国やテロリストに提供してしまうと、国際情勢の不安定化や日本への危害を招くことになる。安全保障貿易管理では、そういった不注意を事前に排除することが求められている」と説明し、同時に、経済産業省のホームページ内においても普及啓発を行っていると紹介しました。

続いて、三菱電機株式会社輸出管理部企画教育グループの高原年朗グループマネージャーが「企業における安全保障輸出管理の取り組み」と題し、「全ての製品・技術はもちろん、サンプル提供、技術打合せ、仕様書の提供、海外生産委託等、広範囲を対象として輸出管理による不正輸出、不正転売転用防止措置を行っている。そのための社内教育・監査を実施し、活力とゆとりある社会の実現に貢献したい」と企業の立場から輸出管理の現状について説明しました。

受講者からは、「輸出管理についての知識は全くと言っていいほど無いためかなり複雑な印象を受けたが、三菱電機の具体的な取り組みの話聞いて、少し理解出来たような気がする」、「外為法について経産省の方から、また、企業における取り組みとして三菱電機の方から貴重な意見を聞いた。プロジェクトを進めるにあたり、スムーズな進行指南調整役が必要であると思った。また、研究に携わっている大学院学生に対しても特許関連について周知させておく必要があると思った」等、様々な感想が聞かれ、今後、この講義をどう活かすかについて話し合っている場面も見られました。

本学の技術、研究成果及び知的財産の正しい活用に役立つ大変有意義な説明会となりました。



講演をする中島氏



講演をする高原氏



説明会の様子

森理学研究科教授の猿橋賞受賞記念講演会を開催

森 郁恵理学研究科教授の猿橋賞受賞記念講演会が、12月20日(水)、IB 電子情報館大講義室において開催されました。これは、文部科学省「めざせ女性科学者－女子中高生理系進路選択支援事業」の一環として行われたものです。

森教授は、「線虫は、餌のある条件で培養してから餌の無い条件で温度勾配の場に移されると、それまで餌のあった培養温度に集まる温度走性を示す」というモデルを使い、



講演する森教授

動物の記憶・学習に結びつく神経回路を提唱し、さらに温度走性に関与するシグナル伝達経路や、神経回路機能の鍵となる分子を発見しました。線虫の分野に留まらず、感覚や学習行動の分子神経遺伝学的な研究として一連の研究が、国際的に非常に高く評価されています。「感覚と学習行動の遺伝学的研究」に対する研究成果により、平成18年春に猿橋賞を、また、自然科学分野で顕著な業績を挙げた研究者に授与される平成18年度井上學術賞の受賞も決定しています。

「ミクロの世界に住む小さな生き物から動物行動の原理をさぐる」と題した講演会には、本学関係者に加え、女子中高生及びその保護者が参加し、森教授の講演を熱心に聞き入っていました。

講演会後に行われた森教授を囲んでの懇談会では、本学の女性科学者も多数加わり、女子中高生、学部学生・大学院学生からの相談を受けるなど、和やかな雰囲気ながらも熱心に研究や進路について語り合う姿が見られました。参加者からは、「実際に今後の進路を決定する上で大変参考になった」との声が聞かれ、参加者にとって有意義な機会となりました。

産学官連携セミナー「イノベーション創出に向けた産学官連携の新たな展開」を開催

産学官連携セミナー「イノベーション創出に向けた産学官連携の新たな展開」が、1月15日(月)、環境総合館レクチャーホールにおいて開催されました。

本セミナーは、「第3期科学技術基本計画」、「知的財産推進計画2006」、「経済成長戦略大綱」等において、産学官連携に携わる大学の役割や、今後の産学官連携活動の強化



講演する佐野課長

に活かしていくことを目的に、全学同窓会及び産学官連携推進本部の主催で行われたものです。

セミナーでは、佐野 太文部科学省研究振興局研究環境・産業連携課長から、第3期科学技術基本計画の概要説明、知識基盤社会における大学改革の方向性等について、同省の平成19年度予算案を交えて講演があり、参加者からの質疑が活発に行われました。同省からは、吉田秀保研究振興局技術移転推進室長補佐の陪席もありました。

本学からは、平野総長、各理事、研究科長及び産学官連携に携わる教職員が出席し、学外からは、岐阜大学、静岡大学、名古屋工業大学、三重大学及び自然科学研究機構より多数の参加があり、大変有意義なセミナーになりました。

舂名大が平野総長を表敬訪問



平野総長らと記念撮影する舂名大（左から4人目）

平成18年11月に角界入りした舂名大（工学部4年生の田中周一さん）が、12月27日（水）、千賀ノ浦親方とともに、平野総長を表敬訪問しました。舂名大は、国立大学から史上3人目、旧七帝大からは初の角界入りとなります。

総長は、「本学の名前をしこ名につけていただき、大変嬉しく思っている。我が息子と思って応援している。体につけて、人間性も磨き、活躍してほしい」と激励し、学章が入った濃緑の旗や目覚まし時計等、記念品を贈呈しました。舂名大は、総長との会話に緊張しながらも激励に応えるように、「来年1年間で三段目に上がりたい。地元出身の琴光喜関が目標です」と力強く抱負を語りました。また、同席した千賀ノ浦親方は、「舂名大はセンス、体格、体質ともに力士として申し分のない素質がある。日々稽古に精進して成長してほしい」と期待を述べました。

表敬訪問の様子は、マスコミにも公開され、新聞、テレビで取り上げられました。

平成18年度学生生活に関する教職員研究会を実施



研究会の様子

平成18年度学生生活に関する教職員研究会が、12月22日（金）、シンポジオンホールにおいて実施されました。

この研究会は、本学における学生指導の諸課題について検討するとともに、学生指導のあり方について研究討論、意見交換を行うことにより、教員及び事務職員の連携をより緊密なものにし、学生指導の円滑な運営を図ることを目的として実施されているもので、杉山理事をはじめ、教職員約70名が参加しました。

今年度は、「大学における危機管理」を研究課題とし、パームコンサルティンググループ広報・危機管理アドバイザーの伊原正俊氏を講師に招き、「平常時の危機管理－大学及び学生をリスク・危機の発生から守る－」と題した基調講演が行われ、参加者は熱心に聞き入っていました。引き続き、「不登校・自殺などの予防策、勧誘被害に対する防止策」等について研究討論を行い、本学の現状と今後の危機管理意識のあり方について活発な意見交換が行われました。

年末キャンパスクリーンを実施



清掃作業の様子

12月20日（水）、年末キャンパスクリーン（屋外清掃）が、全学の教職員及び学生の参加を得て実施されました。

キャンパスクリーンは、構内美化運動の一環として行われており、今年度は名大祭終了後（6月）及びホームカミングデー開催前（9月）にも実施しています。

本部からは約80名の参加があり、真冬の寒空の下、東山キャンパス構内及び周辺の市道に分かれて、枯葉、空き缶、紙くず等の除去や、不要な立て看板、ビラ等の撤去などを行いました。

本学では、今後もキャンパスクリーンを継続していくことにより、「ゴミのないきれいなキャンパス」を目指していきます。

大学入試センター試験が実施される

－ 本学関係会場で約6,850名が受験 －

平成19年度大学入試センター試験が、1月20日(土)、21日(日)の2日間、全国735会場で実施され、本学関係では、東山キャンパスや学外の高等学校など8会場で約6,850名が受験しました。

今年度のセンター試験では、利用大学が前年度より28校増え過去最高となり、志願者についても前年度より1,970



試験に臨む参加者

名増の553,352名で、3年連続の減少からわずかながら増加に転じました。

試験当日は、暖冬とはいえ早朝の厳しい寒さの中、午前7時過ぎにはコートやマフラーで身を包んだ受験生が会場に集まり始め、参考書やノートで最終チェックをしたり、友人との会話でリラックスするなどして、各々の方法で試験に備えていました。また、グリーンベルト周辺では、高校ごとに集合し、教師から激励を受けたり、円陣を組んで健闘を誓う受験生の姿が見られました。

本学関係の試験場では、1日目の公民、地理歴史、国語、外国語、2日目の数学、理科と予定通り行われました。また、平野総長と豊田事務局長が本学関係の各試験場を訪れ、試験場主任、教職員に労いの言葉をかけました。

なお、本学の個別学力検査は、分離・分割方式により、前期日程が2月25日(日)、後期日程が3月12日(月)に実施されます。

「ながれ」の不安定性が作り出す新たな秩序

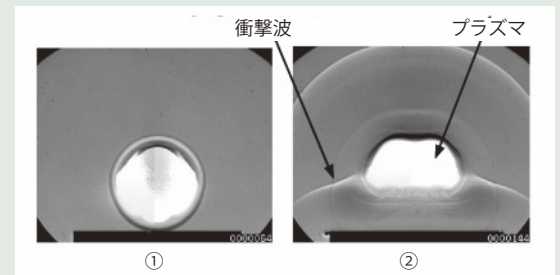
佐宗 章弘 大学院工学研究科教授

ながれは、秩序を保つことを嫌います。エネルギーを一点に集中しようとしても、形が崩れてしまい、力が分散します。しかし、この崩れ方にも秩序・法則があります。元の形が崩れて、新たな秩序（あるいは無秩序）が生まれることもあり、そこに新たな展開を見出すこともできます。

物質が粗密なところに急に力が作用すると、リヒトマイヤー-メシュコフ(Richtmyer-Meshkov, R-M)不安定性と呼ばれる性質が現れ、渦が発生して乱流の種を作ります。R-M不安定性の初期段階における渦の発生は、流体力学のバロクリニック(baroclinic)効果によって説明できます。しかし、その後の複雑な流れの挙動は、様々な乱れに非常に敏感で、実験では異種気体を仕切る隔膜の破片や接触している異種気体間の拡散の影響で流れが乱されてしまい、数値予測できるような流れを作り出すことが困難でした。

これに対して我々は、パルスレーザーによってプラズマを生成し、それが膨張することによってできる衝撃波の反射波をプラズマ自身に作用させる新しい方法を考案し、隔膜や拡散によって乱されることのない界面(密度不連続面)と衝撃波の干渉を観測することに成功しました。図は、圧力40kPaのクリプトンガス中でエネルギー3.6Jのレーザーを放物面に照射したときに高速度カメラで観測した衝撃波とプラズマの様子です。中心に

ある濃淡がついている部分がレーザーで生成されたプラズマで、1万度以上で本当は強い光を発しているのですが、特別な工夫(画像処理ではない)をしてその発光を適量に抑えてあります。①では強い光を発する中心の高温部分が膨張し周囲に球状の衝撃波ができていのがわかります。②衝撃波の上方部分は球形を保ってさらに遠方まで伝播していきます。一方下方では、放物面で反射してプラズマ自身と干渉します。反射衝撃波が通過したあと(③)、プラズマ内部に渦が発生して、プラズマの形がトラス(ドーナツ)状に変形していきます。④では、プラズマの発光がよいレーザーになって、渦発生の様子が鮮明に観測されました。その渦によって中心から上向きのジェットが発生し、プラズマトラスの中心を貫通します(⑤、⑥)。プラズマ界面の状態をみると細かな構造の乱れがあることがわかりますが、この細かな

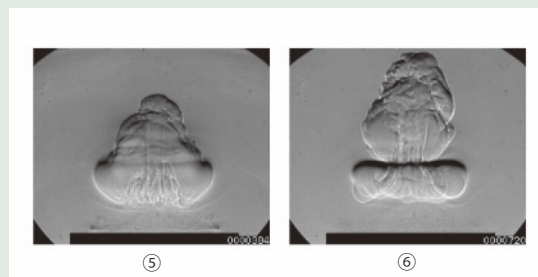
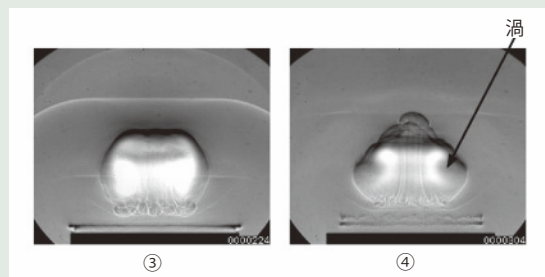


流れは気体の初期圧力に依存することがわかりました。

仕切りによる乱れを伴わない R-M 不安定性の鮮明な可視化は、我々が初めて成し遂げたと自負しています。この現象の解明は、超新星爆発の解明や慣性核融合の実現に対して、最大の課題になっています。このように力学によって物質のトポロジーが変わることは、生命の誕生や太陽系の生成、火山爆発などの自然現象や、火薬による成型加工や圧着など工学・産業においても、様々な場面で現れているのです。

ながれは、「がんこおやじ」に似ています。ニュートン力学に従って、なかなか思うように振舞ってくれません。しかし、逆に R-M 不安定性を利用して高速ジェットを作り出し、燃料噴射・混合や医療に応用しようという試みもなされています。さらに、このような作用を高速で移動する物体周

りの流れにうまく施すと、抗力を何十%も軽減できる可能性がある見通しが得られています。飛行機の動力は抗力に打ち勝つために消費されます。抗力が半減すれば、燃料は半分で済みます。いまの抗力レベルで燃料費が1万円掛かっているとして、100円出して小さなエネルギー作用を施すと5千円のお釣りが返ってくる、こんなこともまんざら不可能ではなさそうです。ながれと上手く付き合う、そうすればがんこおやじは絶対に裏切らない、そう信じて新しい抗力低減法、宇宙推進法の開発などに取り組んでいます。



レーザープラズマと衝撃波の干渉によるリヒトマイヤー - メシコフ不安定性の可視化画像
(レーザーパルス照射後の時間; ①64 μ s、②144 μ s、③224 μ s、④304 μ s、⑤484 μ s、⑥720 μ s)

愛知県出身、1989年東京大学大学院工学系研究科航空学専攻博士課程修了、工学博士、同年4月より名古屋大学工学部航空学科助手、1991年7月東北大学流体科学研究所助教授、2003年3月同教授、2006年4月より現職。その間、1994~1995年ワシントン大学客員研究員、1999年クイーンズランド大学客員研究員。
専門分野：圧縮性流体力学、宇宙推進工学
趣味：詰将棋創作、体を動かすこと（スポーツ、ダンス）

さそう あきひろ



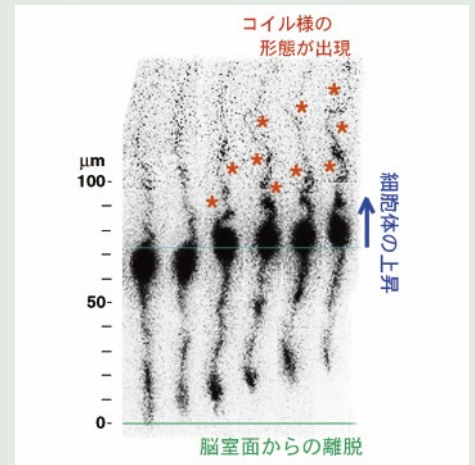
大脳皮質原基において細胞突起のよじれに依存したバネ様機構が娘細胞の移動を助ける

宮田 卓樹 大学院医学系研究科教授

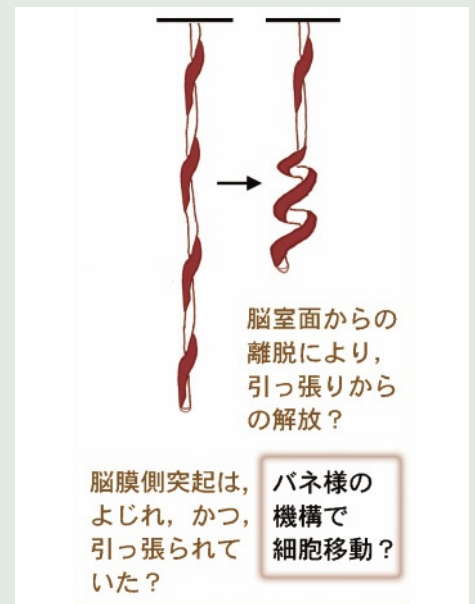
「力」・「機械的作用」が脳の形成に貢献するかどうか、もしイエスならばいかにしてなのか、私は、胎生中期のマウス大脳皮質原基をモデル系としてこの問題に取り組み、娘細胞の保有する突起が「よじれ+引っ張り」から解放されることで「バネ」のように働き、速やかな核・細胞質移動、すなわち効率的な脳の「建築」に貢献することを発見しました。

発生期の大脳原基では、「細胞づくり」と「立体的な組み立て」を同時進行させることが求められます。その課題を巧みにこなしているはずの細胞たちの営みに潜む原理・知恵を理解するためには、三次元組織のなかでの個々の細胞の形態と挙動をつぶさに観察する必要があります。私は、生の脳スライスに対して散発的な蛍光標識を施した上で培養する手法を用いてきました。そして、以前の研究で、ニューロン産生に預かる「前駆細胞(母細胞)」は脳壁の内面(脳室面)と外面(脳膜面)を結ぶ細くて(直径1/500 ミリ)、長い(0.2~0.3 ミリ)双極型をしていることを明らかにしました。

前駆細胞は、脳の壁にびっしりとまるで「えのき茸」のようにひしめいており、細胞周期進行に伴う核移動の後、脳室面で分裂して娘細胞を生み出しますが、この分裂の際に、脳膜側の突起が娘細胞片方に丸ごと相続されるので、「突起相続娘細胞」は生まれながらにして双極型です。双極型娘細胞は、非双極型(突起非相続)娘細胞に比べて脳室面からの移動開始が速やかであることから、私は、双極型娘細胞の脳膜側突起が核・細胞体移動に役立つと考えてきましたが、その具体的な理由は不明でした。相続突起依存的な細胞移動のしくみを深く理解したいとの目的のもと、娘細胞の形態変化をさらに詳しく調べたところ、脳



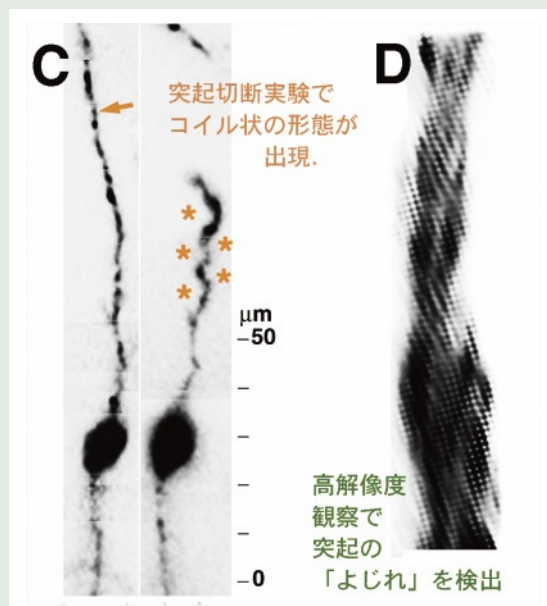
図A スライス培養で捉えた「娘細胞の旅立ち」



図B 新しい移動機構のモデル

室側の突起が脳室面から抜かれるに従って細胞体が挙上されること、そして脳膜側突起にコイル状形態（あるいはヘアピンループ状構造）が現れることに気づきました（図A）。このようなスライス培養下の観察結果と、シリコンチューブ、プラスチックフィルム、ゴムひもなどを利用した肉眼的シミュレーションを行った結果に基づき、「脳膜側突起があらかじめよじれかつ引っ張られている」「脳室面との結合解消による引っ張りからの解放の際に、よじれに依存したバネ様の作用が娘細胞の細胞体を挙上させる」とのモデルを考えました（図B）。

そこで脳原基スライスに対して微小キャピラリーによる突起切断実験（図C）を行いました。



図C、D 仮説を支持する結果

もし双極型細胞の脳膜側突起が予想通りによじれ、かつ引っ張られているのなら、切断された脳膜側突起はコイル状の形態をとるはずですが。実験は、確かにそうした形態変化をもたらしました。双極型細胞の脳室側突起を切断した際にも同様のコイル様形態が出現し、その場合、細胞体挙上が観察されました。突起が本当によじれていることを高解像度の顕微鏡観察（図D）によって確かめました。さらに、各々の細胞骨格成分に対する個別の阻害実験を通じて、中間系フィラメントがよじれ形成に強く貢献していること、すなわち、双極型細胞の体内で中間系フィラメントが微小管、マイクロフィラメントという他の細胞骨格繊維と「建材」としての役割分担をしていることが分かりました。

このように、本研究では、脳原基の「構造力学」をはじめ具体的に示すことができ、かつ、従来予想されなかった細胞移動機構を知ることができました。本研究は、理化学研究所脳科学総合研究センターの小川正晴チームリーダーとの共同研究で行われ、成果は1月23日付けのカレントバイオロジー誌に掲載されました。三次元的な脳の「組み立て」の過程にはまだまだ未知のからくりが潜んでいるはずです。それを解き明かすためには、引き続き細胞の振る舞いを注視する取り組みが求められます。

1988年高知医科大学卒。同大耳鼻咽喉科で2年間勤務の後、脳発生研究へ。同大学院、理化学研究所ライフサイエンス筑波研究センター、東京大学医科学研究所、コロラド大学ボルダー校、大阪大学、理化学研究所脳科学総合研究センターを経て、2004年1月から名古屋大学大学院医学系研究科（細胞生物学）教授。
最近の注目句「しかしそれを掘り出すには、人から笑われ狂人扱いされることを覚悟する勇気が入り用である」（寺田寅彦「備忘録」1927）。

みやた たかき



平成18年度名古屋大学体育会会長表彰式 受賞者及び受賞団体のことば

名古屋大学体育会会長表彰式が、12月4日(月)、野依記念学術交流館1階会議室において行われました。本号では、前号(164号)で紹介した各受賞者及び受賞団体一覧の中から、2受賞者及び2受賞団体のことばを紹介します。

【個人の部】

大学弓道を始めて

松川 あゆみ 弓道部



体育会会長表彰受賞後の記念撮影

大学に入学して弓道部に入るかとても迷いました。新しいことを始めてみたいと思っていた上に、高校の部活と違う大学の部活という新しい環境で活動することが不安でした。何度か見学に行き、他の部活、サークルも見て、結局新歓期に少し遅れて入部するに至りましたが、未だに高校の時とのギャップに悩むこともあります。全く異なる環境で活動してきた人達が集

まって一団体として動くには、今までの自分にとらわれていたのでは駄目だと思い知らされました。そんな中、同級生、上級生等多くの方々支え、指導して下さい、話を聞いて下さいました。

入部して半年、新人戦では、ある上級生が前日、当日を通して時間のある限り指導し、アドバイスを下さったお陰で、全く不安なく、とても落ち着いた気持ちで試合に臨め、その結果、優勝することができました。体育会会長表彰も含め、この優勝はお世話になった方々へのお礼だと思っています。

今、私は上級生として部を運営する立場になりました。自分が貰った周りの人の協力による恵まれた環境を、できる限り多くの人に味わってもらいたい、また自分もこの環境に甘えすぎないようにしたいと思いつつ、日々部活動に励んでいます。

最後になりましたが、今回このような賞をいただき、大変嬉しく思います。この表彰が、新しい環境で弓を引き続けるのに、大きな自信を与えてくれました。本当にありがとうございました。

まつかわ あゆみ
農学部資源生物環境学科2年
1986年生まれ 埼玉県出身

体育会会長表彰受賞にあたって

渡邊 淳史 ヨット部



全国大会での試合風景

「名古屋大学ヨット部を復活させたい。」編入学しようと思ったのはこの気持ちがきっかけでした。「ヨット部は数年前から部員数が減少し、2年前に完全に部員がいなくなった。」と聞いたのが、前の大学の1年生の終わり頃。この目標のため、すぐに勉強に取りかかりました。

無事試験に合格し、昨年4月に入学しましたが、ゆっ

くりはできませんでした。4月から1ヶ月間、自分も新入生であるにもかかわらず、すぐ新歓活動をするともに、並行して週20時間以上の授業を受け、さらに部活のためのアルバイトをしました。そんな生活の中、6月にはもうインカレ予選です。高校のときにヨット部に所属していたとはいえ、大学1・2年時はヨット部に所属していなかったため2年以上のブランクがあり、予選通過が難しく思えました。エントリー30チームの中から4チームのみ獲得できるインカレの切符。この切符を得るため、少ない時間で効率よく成長ができる練習を心がけました。練習では、自身の現状把握をしたり、そこで分かった自分の欠点を徹底的に克服したりしました。その結果、予選一位でインカレに出場でき、体育会会長表彰を受賞することもできました。

最後に、体育会会長表彰という名誉ある賞を受賞できたのは部員をはじめ、OB、学務企画課の担当者様、その他関係者の方々のお陰と思っています。ありがとうございました。

わたなべ あつし
経済学部経済学科3年
1985年生まれ 愛知県出身

[団体の部]

体育会会長表彰受賞にあたって

航空部 北澤 祐輔



七大戦でのテイクオフ

今回、体育会会長表彰に航空部が選ばれたことを、部の一員として大変名誉なことに感じています。今回の受賞は、訓練を支え、技術向上に寄与して下さったOB・OG会の方々、また新機体の導入を進めて下さった大学の方々の多大なるご協力のお陰だと受け止めています。部員とともにこの喜びを分かち合いたいと思います。

1年生のとき、空を飛ぶことに憧れて入部し、その後多くの先輩の偉大な姿を見て感動し、刺激されてきました。学年を経て、フライト数も増えてくるにつれ、フライトだけでなく競技にも興味を持つようになり、4年生になろうとしている今、後輩を刺激し、部のレベルを内側から高めていけるような先輩になりたいと思っています。

われわれの活動の内容であるグライダーの操縦には、高度な知識と経験を要します。また航空機で空を飛ぶという活動の性質上、常に危険を伴うため厳しい規律とメンバー同士の連携が必要となります。他大学の航空部員からは、名大航空部の訓練は厳しいといった意見が聞かれますが、この厳しい訓練こそが名大航空部を東海で、そして全国でもトップクラスにしている要因だと強く確信しています。

航空部はこれまで七大戦7連覇、東海関西競技会団体・個人優勝など高い実績を残してきました。卒業後も個人で日本記録を打ち立てているOB・OGもいます。今後も皆様の期待に応えるべく、日々の1フライトを大切に、技量の向上に努めていきたいと思しますので、応援をよろしくお願いいたします。

きたざわ ゆうすけ
工学部機械航空工学科3年
1985年生まれ 東京都出身

体育会会長表彰受賞にあたって

舞踏研究会 小島 健児



大学生生活最後のダンスを披露する4年生

この度はこのような栄誉ある賞を受賞することができ、部員一同大変嬉しく思っています。2006年は、学年別戦から始まり、七帝戦、中部モダン戦、種目別戦、八種目戦、東西対抗戦と6つもの試合で団体優勝することが出来ました。特に、強豪の集う七帝戦や西日本規模で開催される東西対抗戦での優勝は、非常に意義深いものであったと思います。今回このような結果が

残せたのは、2005年度、私達の主な練習場所である学生会館の床を学務企画課に補修して頂いたことが大きな要因であったと思います。お陰で部員達も学生会館で今まで以上にやる気を出して練習するようになりました。今回の受賞は、周りの方々の多大な協力があったこそのもです。

現在、部員達は次の大事な大会に向けて練習に励んでいます。正規練習では、4年生がいなくなった新しい環境のなかで、ダンスの技術を教える者と教わる者がともに部内での自分達の役割を模索しながら練習しています。新しい世代を、前の世代に恥じない様になりたいという思いが部員達の中に徐々に現れてきているように感じられ、嬉しく思います。そんな思いが部員達を結びつけ、舞踏研究会がよりよい集団となることを願っています。そしていつの日か、全日本での大会で団体優勝を取めるのが私たちの目標であります。

今後もこれまで様々な形で援助していただいた方々への感謝の気持ちを忘れずに、来年も団体の部で受賞が出来るよう部員一同力を合わせて全力で部活動に取り組んでいきたいと思ひます。ありがとうございました。

こじま けんじ
工学部化学生物工学科3年
1986年生まれ 愛知県出身

16. FOREST



Books & Cafe Fronte
 構造 鉄骨造
 階数 地上2階建て
 建築面積 350㎡
 延べ面積 572㎡

Dining Forest
 構造 RC造
 階数 地上2階建て
 建築面積 565㎡
 延べ面積 662㎡

「FOREST（フォレスト）」は、東山キャンパスで長い間親しまれてきた第一理科系食堂（中華）と第二理科系食堂を改築・改修してできた総合的な機能を持つ福利厚生施設です。旧第一・第二理科系食堂は、名古屋大学生協の中で最も古い食堂であり（昭和41年・47年竣工）、建物自体と設備配管等の老朽化が激しく、また、ユーザーから現状の改善を要望する声も多かったことから、今回、「名古屋大学の理系福利厚生施設としてふさわしい施設づくり」を目指し、改築・改修することとなりました。

これまで四ッ谷通りから東側のキャンパスには、専門書を扱った書籍店がありませんでした。そこで、長年の要望に応え、旧第一理科系食堂を書籍店とカフェの機能を持つ「Books & Cafe Fronte」（平成18年5月オープン）として、東側の旧第二理科系食堂を「Dining Forest」（平成18年10月オープン）として再整備しました。名称は学内公募により、今井名古屋大学消費生活協同組合専務理事の発案である「FOREST（For Eat & Study Talk）」に決まりました。

これら二つの建物を改築・改修するに当たり、念頭に置かれたことは、「別々だった建物を有機的に結びつける」ということでした。二つの建物の間の軸線上にメインアプローチである外部階



段を設けて主動線とし、建物間が行き来できるようにしています。これにより、「Books & Cafe Fronte」側に取り付けたエレベーターを用いることで、完全なバリアフリー化を実現しています。また、この外部階段を視線と風が南北に抜けるような形で設計することで、閉塞感を軽減し、北側に見える雑木林と一体でアプローチを演出しています。また、「FOREST」の名前に相応しいよう計画地付近の竹や雑木の手入れを行い、適切な木陰造りによる「心地よい外部空間の提供」と「建物内部への採光性の向上」を図りました。それぞれの建物の特徴は次の通りです。

● Books & Cafe Fronte

建物南側正面のデザインは、縦ラインを強調したガラスカーテンウォールとしています。ガラ

ス面に貼られた透明度の異なる3種類のフィルムは、周辺に対しての開放性や建物内部と外部の繋がり多様性を醸し出すとともに、日照をコントロールし空調負荷を軽減する役割も担い、魅力ある書籍店を演出しています。また、このガラスカーテンウォールの室内側足元には給気口が設けられ、中間期には外気を取り込むことで空調負荷を軽減します。

建物内部は、南側約4m部分を吹き抜けとすることで、空間に広がりを与えるとともに、1階からの2階フロアー（書店やカフェ（60席））の視認性を良くしています。また、書籍店として快適な空間を演出するために、既存の第一理科系食堂の1階床レベルを30cm程度下げて充分な天井高さを確保しました。

なお、この建物の建設資金（エレベーターと外構を除く）は、名古屋大学消費生活協同組合の寄贈によるものです。

● Dining Forest

旧第二理科系食堂は、既設建物の構造はそのままに内部機能の大幅な向上を図りました。

厨房を含め、内外装の仕上げの全面撤去・改修をし、1階にはこれまでなかった多目的トイレを設けるとともに男女トイレを広くしています。2階の食堂ホールでは、内部階段を外部に移設することで床を増床して座席数を220席とし、隣のカフェをあわせると合計280席の、従来の第一・第二理科系食堂と同数の座席数を確保しています。内装は白を基調とし、清潔感のある空間をイメージしました。また、間接照明を採用し、柔らかい光が溢れる空間を演出しています。外観デザインでは、南面の開口部を大きく広げ、積極的に自然光を取り入れつつも、夏期の直達日射を遮る位置に庇を設け、さらにガラスには遮熱フィルムを貼ることで空調負荷の軽減を行っています。

（施設管理部）



1	2
3	4

- 1 中央外部階段
- 2 Dining Forest 食堂内部
- 3 改築前の第一理科系食堂
- 4 改築前の第二理科系食堂

公開講演・シンポジウム「大学全入時代の高等教育マネジメント」を開催

●大学院教育発達科学研究科

大学院教育発達科学研究科高等教育マネジメント分野は、12月9日(土)、教育学部講義棟において、公開講演・シンポジウム「大学全入時代の高等教育マネジメント」を開催しました。同分野は、大学に関わる社会人を対象として、経営プロフェッショナルの養成を目指す大学院プログラムです。



会場の様子

講演・シンポジウムは、近い将来到来するとされる「大学全入時代」に直面しての大学経営における課題をテーマに行われ、公開講演では、河合塾教育情報部長の服部周憲氏が、昨今、18歳人口が減少する中での国公私立大学入試の概況や、近年の受験生の大学・学部選択の特徴について話し、そうした環境の中での大学経営の課題を指摘しました。続いてシンポジウムでは、同氏に加えて、同研究科同分野に在学中の私立大学職員や同研究科教員が、「全入時代」における高等教育経営の課題と展望について、大学経営の現場や政策立案の観点から論じました。その後行われた質疑応答では、大学経営の課題や大学職員の役割、政府の関与のあり方など、一般の参加者を交えて活発な議論がありました。

参加者は、公開講演・シンポジウム併せて60名ほどあり、遠方からの参加者も多く、テーマへの関心の高さが伺われました。

国際シンポジウム「中国における社会経済インフラとビジネス環境」を開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センターは、12月17日(日)から19日(火)、21日(木)、26日(火)、27日(水)の6日間の計42時間、文系総合館カンファレンスホールにおいて、社団法人キタン会、中国 北京理工大学、中国 交通大学と共同で、国際シンポジウム「中国における社会経済インフラとビジネス環境」を開催しました。



会場の様子

同センターでは、経済学研究科と一体となりアジア研究拠点事業を推進しており、日中の政府機関・企業等や、アジアの他大学・研究機関と合同で、産学官連携による研究プロジェクトを展開しています。本シンポジウムは、同研究科と学術交流協定を締結している北京理工大学から11名、西南交通大学から4名の教授陣を講演者とし、同研究科を中心とする教員を討論者として企画され、学内外から延べ約200名の参加があり、国際シンポジウムと呼ぶに相応しい講演会となりました。

シンポジウムでは、近年発展の著しい中国について、経済発展、西部大開発、地域格差、金融等の経済に関するテーマと、研究開発、技術移転、情報化、流通産業、商慣習、法務、労務管理等中国ビジネスに関するテーマの合計14件のテーマについて話し合わせ、いくつかのテーマについては、今後共同研究として発展していくことが決まりました。

なお、通訳は同研究科の大学院学生及び研究生が担当し、シンポジウム終了後には、中国側の教授陣から、彼らの高い日本語能力に対して賞賛と感謝の言葉がありました。

坂田模型50年国際シンポジウムを開催

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、11月25日(土)、26日(日)の2日間、理学部1号館大講義室において、坂田模型50年国際シンポジウムを開催しました。

シンポジウムには、ノーベル物理学賞受賞者のGerardus 't Hooft (ゲラルド ト フーフト) オランダユトレヒト大学教授を始め、ノーベル賞の有力候補と言われる小林 誠氏、益川敏英氏など国内外の著名な物理学者を多数含む、90人の素粒子物理学分野の理論物理学者が集まりました。

坂田模型は本学の故坂田昌一教授によって提唱され、クォーク模型の原型となって今日の素粒子物理学に決定



参加者による記念撮影



講演する小林氏(右)と質問する't Hooft氏(左)

的な一歩を与えており、論文は1956年12月に発表されました。坂田模型とこれに続く「名古屋模型」の延長線上には、ニュートリノ混合を提唱し、レプトンのフレーバー混合の基礎となった「牧・中川・坂田理論(MNS行列)」、さらには坂田門下の小林氏、益川氏による、クォークのフレーバー混合とCP対称性の破れに対する「小林・益川理論(KM行列)」が生まれました。MNS行列は、神岡でのニュートリノ振動の観測で、KM行列は、KEKやSLACのBファクトリーの実験でそれぞれ検証され、今日の素粒子物理学を根底から支えています。

シンポジウムは、山本理事のあいさつに続いて、坂田模型の誕生とその後の発展について、著名物理学者らにより14の講演と討論が行われ、坂田模型の歴史的意義が様々な角度から掘り下げられ、その偉業が改めて浮き彫りにされました。

なお、今回の様子は、坂田模型の発表された『Progress of Theoretical Physics, Supplement』として刊行予定です。

第5回坂田・早川記念レクチャーを開催

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、12月16日(土)、名古屋市科学館サイエンスホールにおいて、名古屋市科学館との共催により、第5回坂田・早川記念レクチャーを開催しました。同レクチャーは、故坂田昌一教授及び故早川幸男教授の業績を称え、21世紀を担う次世代の優れた研究者を育成することを目的に設立され、同研究科と名古屋市科学館の共催により

毎年行われているものです。

今回は、学士院会員の西島和彦東京大学・京都大学名誉教授が「ミクロの世界の不思議な法則-素粒子とは-」と題した講演を行いました。同名誉教授は、坂田模型を経てクォーク模型にいたる素粒子物理学の革命の最初のステップで、今日の素粒子のフレーバーの自由度という素粒子物理学の中心概念を構成している“西島・ゲルマン則”を発見し、ストレンジネスという素粒子の自由度を導入したことにより、平成15年度文化勲章を受章しています。

同教授は、これまで開拓してきた素粒子物理学の歴史を振り返りつつ、身近な例から素粒子物理学の魅力を語り始め、現代的視点で分かりやすく解説しました。

当日は、高校生を中心に大学生、一般の方等約200名の参加があり、講演後には、多数の高校生から熱心な質問があり大変盛況でした。



講演の様子

21世紀 COE プログラム「宇宙と物質の起源:宇宙史の物理学的解説」 クリスマスレクチャーズを開催

21世紀 COE プログラム「宇宙と物質の起源:宇宙史の物理学的解説」は、12月24日(日)、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、クリスマスレクチャーズ2006「物理学の最前線は何を見たか」を開催しました。

これは、同プログラムが重視する情報発信活動の一環として行われたものです。

シンポジウムでは、杉山 直理学研究所教授の「宇宙の構造とその形成」と題した講演を皮切りに、素粒子、宇宙、生物物理及び物性物理等についてのまだ世に知られていな

い最新の研究成果10件が紹介され、ここ数年の研究で、物理学研究の各方面で注目すべき前進があることが、研究者らによって生き生きと語られました。

当日は、クリスマスイブにも関わらず、中高生、大学院学生、一般の方など219名が会場を埋め尽くし、熱心に講演に聞き入っていました。参加者のアンケートでは、「興味深い内容が多く、とても面白かった」、「最新の研究報告は、とても刺激的で頭にカツをいれてくれます」等の意見があり、この企画への期待が寄せられました。

なお、この講演会の模様は、NHK ニュースでも放映されました。



講演の様子



質問する参加者

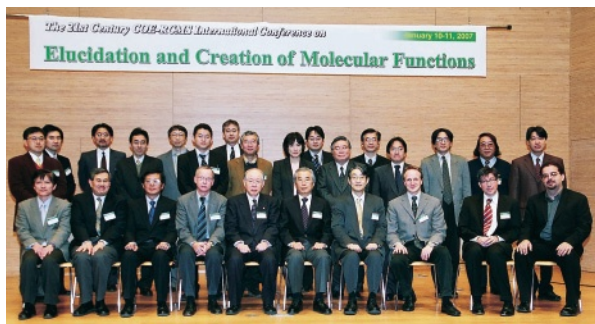
21世紀 COE プログラム「物質科学の拠点形成:分子機能の解明と創造」国際会議を開催

21世紀 COE プログラム「物質科学の拠点形成:分子機能の解明と創造」は、1月10日(水)、11日(木)の2日間、野依記念学術交流館において、「The 21st Century COE-RCMS International Conference on Elucidation and Creation of Molecular Functions」と題した国際会議を開催しました。本国際会議は、大学院理学研究科物質理学専攻及び物質科学国際研究センターが中心となっている同プログラムの最終年度における総括として行われたものです。

会議では、平野総長によるあいさつの後、プログラムリー

ダーの関 一彦同研究科教授による概要説明があり、続いて、野依良治特別教授(理化学研究所理事長)による「合成化学に求められる実践的エレガンス」と題した基調講演及び飯島澄男名城大学教授によるナノカーボン材料の最新の展開についての基調講演が行われました。その他、国内外の著名な研究者による9件の招待講演、学内からの3件の成果報告等、分子触媒、精密合成から有機機能性材料、ナノカーボン科学、分析化学、生物化学の幅広い分野における最新の動向が報告されました。

同時に、大学院学生及び博士研究員による76件のポスター発表も行われ、学内外から集まった370名を超える参加者は、全てのプログラムにおいて、活発な議論や意見交換を行い、国際会議を楽しんでいました。本国際会議は、同プログラムの成果を示し、次のステップへとつながるよい機会となりました。



記念撮影



講演する野依特別教授

「小林・益川理論」の検証に関する国際研究会を開催

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、12月12日(火)から16日(土)の間、野依記念学術交流館において、21世紀COEプログラム「宇宙と物質の起源」、高エネルギー加速器研究機構及び井上科学財団の協賛、後援により、第4回キャビボ・小林・益川ユニタリティ三角形の測定に関する国際研究会(CKM2006)を開催しました。

同研究会は、物質の最小基本単位であるクォークの相互作用を説明する理論として、小林 誠高エネルギー加速器研究機構名誉教授と益川敏英京都産業大学教授が提案した



参加者の集合写真



(左から) 飯嶋助教授、小林名誉教授、ニコラ キャビボ教授、アキラ ストッキー博士、三田教授

「小林・益川理論」の検証に関するもので、研究会には、両氏に加え、この分野で先駆的な研究をしているニコラ キャビボローマ大学教授も参加し、クォーク相互作用の研究に関する歴史的経緯についての紹介等がありました。

本学は、丹生 潔名誉教授らによるX粒子(現在cクォークと呼ばれている粒子)の発見や、大島隆義同研究科教授及び飯嶋 徹同研究科助教授らがBファクトリー実験において、三田一郎神奈川大学教授らが理論的に予言したクォークと反クォークの対称性の破れの検出に成功するなど、常にこの分野の中心的な役割を担っています。

会期中は、国内外から200名を超える研究者が参加し、Bファクトリー実験等で得られた最新データに基づく、熱のこもった議論が連日展開され、「小林・益川理論」の正しさを確認でき、成功裡に終了しました。

第3回東海地区 CSI 事業報告会を開催

●情報連携基盤センター

情報連携基盤センターは、12月15日(金)、同センター演習室において、附属図書館及び国立情報学研究所(NII)の共催により、第3回東海地区最先端学術情報基盤(CSI)事業報告会を開催しました。

今回は、次世代ネットワーク、グリッドコンピューティング及び認証基盤に焦点をあて講演が行われ、まず、



報告会の様子

高西 功独立行政法人情報通信研究機構連携研究部門テストベッド推進グループ参事が、JGN IIの概要と研究事例に関して、高速ネットワークを用いた実証実験について講演しました。続いて、全国共同電子認証基盤構築事業と本学の電子認証基盤の紹介、UNIXとWindowsの認証サーバの統一に関する調査、ナレギ ミドルウェアのインストール事例紹介があり、篠田成郎岐阜大学情報セキュリティ最高責任者(CISO)及び太田義勝三重大学総合情報処理センター長による学内認証基盤・情報戦略に関する紹介がありました。

当日は、各大学から50名程度の教員、事務職員、技術職員が参加し、報告会後に行われた懇親会では、学内認証及びネットワークの実務者や研究者との間で活発な交流が見られました。来年度も同様の報告会が行われる予定です。

徹底討論「次の東海地震はどこだ!？」を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センターは、1月12日(金)、野依記念学术交流館カンファレンスホールにおいて、徹底討論「次の東海地震はどこだ!？」を開催しました。

まず、第1部として、山中佳子東京大学地震研究所助手、鹿島建設株式の武村雅之氏、谷岡勇市郎北海道大学大



東南海地震の震源域について議論を行う講演者

学院理学研究院助教授、独立行政法人海洋研究開発機構の小平秀一氏、鷺谷 威環境学研究科助教授の5名の専門家から1944年に起こった東南海地震の震源域(すべり領域)がどこまで広がっているのか、に焦点をあてた最新の成果報告が行われました。報告では、1944年当時は第二次世界大戦中であったため限られた観測データしかありませんが、そのデータを最大限に活用し、他の観測データとの不一致を少しでも解消しようと努力していることなどが参加者に伝えられました。

引き続き行われた第2部では、安藤雅孝同研究科教授を交えて、地震波形、震度分布、津波波形、地殻変動、地下構造の観点から、切迫しつつある東海～東南海地震について、パネルディスカッション形式の討論会を行いました。討論会では、地震時にはどの領域で、どのようなすべりが起こりやすいのか、について議論を行い、地震の発生時間の予測に関しては、現時点では最新の科学をもってしても難しい、との説明がありました。特に、「観測やシミュレーションでは予測できないことが、自然界には多く存在する」ということを日々認識しておかなければならない、と考えさせられる非常に意義深い討論会となりました。

第25回、第26回防災アカデミーを開催

●災害対策室

第25回防災アカデミーが、12月21日(木)、環境総合館レクチャーホールにおいて開催されました。今回は、1970年代前半に南海地震をはじめとした南海トラフ巨大地震の発生モデルを世界で初めて提唱するとともに、以後30年以上、そのメカニズムの解明に取り組んできた、安藤雅孝環境学研究科教授による「南海トラフ巨大地震の残された謎」と題する講演が行われました。講演では、次の地震発生を予測する上で重要な意味を持つが、いまだ多くの謎が残されている1605年慶長地震に焦点をしぼり、その地震像をわか

りやすく紹介しました。また、日本列島の南岸沿いの場所で、2004年スマトラ沖超巨大地震のような地震が起こりうるのではないか、という話題も取り上げられ、会場は定員を超える125名の参加者でいっぱいになりました。

1月16日(火)には、第26回防災アカデミーが開催され、西澤泰彦同研究科助教授による「濃尾地震と建築物の耐震化」と題する講演が行われました。濃尾地震は名古屋にも大被害をもたらした地震で、近代的で大がかりな災害調査がなされた最初の地震でもありました。講演では、その調査から当時の建築学者たちが何を学び、どのような耐震対策を提案し普及させていったのかをわかりやすく紹介しました。特に、当時の近代建築であるレンガ作りの建物ばかりでなく、木造の建物についても多くの研究がされていたことは、防災アカデミーの常連参加者でも初めて聞いたという方が多かったようです。



講演する安藤教授



第26回防災アカデミー講演の様子

第2回大学院FD研究会を開催

●医学部保健学科・大学院医学系研究科

医学部保健学科及び大学院医学系研究科は、1月10日(水)、同学科東館大講義室において、大学院教育及び研究の質の水準化さらには向上を目指し、教員向けに第2回大学院FD研究会を開催しました。

平成18年9月に第1回目を開催し、カリキュラムの組み方、シラバスの作成法、特色ある教育法実践例についての



質問する小嶋保健学科教授(左)と講義する宇佐美教授(右)

検討を行いました。

第2回目である今回は、「大学院研究の指導法－介入と自律性－」をテーマに、タスクフォース(作業担当)を宇佐美 眞神戸大学医学部教授と寶珠山 稔同学科教授・教育委員長が受け持ち、河村同学科長の司会進行のもと行われました。

まず、同研究科(保健学科)教員のアンケート結果の報告と解説が寶珠山教授からあり、次に、宇佐美教授から神戸大学の大学院教育の現状報告がありました。続いて、先にあった報告等を基に、研究テーマの選び方、研究水準の維持、研究の継承性等について、全体でディスカッションを展開しました。同学科教員68名の参加があり、今後の大学院教育及び研究の充実と発展が期待されます。

* FDとは、ファカルティ・ディベロプメントの略で、日本の大学では教育改善のための組織的取り組みを指す言葉として用いられています。

平成18年度放射性同位元素等取扱施設安全管理担当教職員研修を開催

●アイソトープ総合センター

アイソトープ総合センターは、11月1日(水)、2日(木)の2日間、野依記念学術交流館及び同センターにおいて、平成18年度放射性同位元素等取扱施設安全管理担当教職員研修を開催しました。

本研修は、東北大学、東京大学、京都大学、大阪大学、名古屋大学の各アイソトープ総合センターが持ち回りで開

催しており、今年度は本学を当番校として行われました。

まず、平野総長より開催のあいさつがあり、引き続き、文部科学省科学技術・学術政策局原子力安全課放射線規制室の宮田 仁放射線検査管理官による「放射性同位元素等の規制に係わる最近の動向」と題する特別講演があり、その後、「X線測定及び安全取扱実習」と「GM計数装置による ^{14}C と ^{35}S 模擬汚染線源の核種識別と汚染評価」についての実習が行われました。大学などの放射性同位元素等取扱施設から参加した40名の受講生は、熱心に取り組んでいました。



X線測定及び安全取扱実習の様子

ICCAE 2006年度第7回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、12月19日（火）、生命農学研究科会議室において、2006年度第7回オープンセミナーを開催しました。

セミナーでは、ジョン C. オンヤング同センター客員教授による「ストレス生理学的研究とケニアにおける陸稲（ネリカ米）生産の展望」と題した報告が行われ、同客員教授



セミナーの様子

は、「土壌水分ストレスがかかると植物全体の生育量が低下するが、根の生育が相対的に増加したり、水吸収に適した根が形成されたり、乾物生産／吸水量比で示される水利用効率が改善されたりする。しかし、品種により差があるため、さらに実験を進める必要がある」と話しました。今後、ケニアと本学との間で、土壌水分変動により適応した品種の根の特性解明のための共同研究が期待されます。

参加者は、約20名あり、品種特性を十分発揮できるような栽培技術の検討や若手研究者や学生の交流を深め、相互補完的に研究を進めていくことの重要性に対する指摘と提案がなされました。

第24回オープンレクチャーを開催

●附属図書館

附属図書館研究開発室は、1月15日（月）、同館5階多目的室において、第24回オープンレクチャーを開催しました。

これは、同室が掲げる図書館のハイブリッド化に関する研究開発及び学術情報流通を主なテーマとして、平成14年度から学内外の方を対象に開催しているもので、24回目の今回は、雨森弘行お茶の水女子大学参与（本学附属図書館



オープンレクチャーの様子

研究開発室研究協力者）が、「学術情報システムの誕生と女性リーダーの軌跡：今後のリーダーへの期待」と題して講演を行いました。

講演では、学術情報流通を支えてきた「学術情報システム」について、学術情報センター（国立情報学研究所の前身）の誕生秘話など、現場に立ち合わなければ知ることのできないエピソードを交えながら、その成り立ちが紹介されました。また、雨森参与の当時直属の上司であった女性課長（遠山敦子元文部科学大臣）の、学術情報システム及び教育・文化行政に係る挑戦的な改革と、その原動力となった人間力を例に、今後のリーダーとはどのようにあるべきか、について次代を担う若手図書館員に対して、期待をこめて語りました。

講演終了後は、組織の中でいかに新規事業を展開し、変革を進めて行ったのかといった点を中心に、変革が求められている現在の大学図書館において、実務を担っている図書館員の視点を交えた活発な質疑と意見交換が行われ、充実したレクチャーとなりました。

博物館が第66回特別講演会を開催

博物館は、12月19日(火)、第66回特別講演会「蔵書票の図像文化学 (アイコノロジー)」を開催しました。

これは、第9回博物館企画展「本に貼られた小さな美の世界 蔵書票」をより深く理解するための連続講演会の第4回目で、約75名の参加がありました。

講演会では、鈴木繁夫国際言語文化研究科教授が「蔵書



講演する鈴木教授

票の図像文化学 (アイコノロジー)」と題し、蔵書票のもつ文化的意味を蔵書票が生まれる条件との関連で、深く詳細に分析しました。蔵書票発生の前提条件である書籍の個人所有や蔵書票の特徴である絵(形像)と文字(文言)の共存がいつごろから始まったのか、絵画の図柄を読み解くことで明らかにしたり、絵柄に隠された意味を読み解くことの難しさを、「片足をあげたツル」などに即し、多数の出典を紹介しながら説明しました。参加者は、蔵書票や絵柄(意匠)の世界の奥深さに思わず引き込まれ、「知」の楽しさを感じられたようでした。

約2ヶ月の期間中1,569名が入場した第9回企画展は、12月23日(日)、好評のうちに幕を閉じました。

博物館が「アイルランド音楽へのいざない」コンサートを開催

第17回博物館コンサート (NUMCo) が、12月19日(火)、同館展示室において、第9回企画展の関連イベントとして開催されました。

「アイルランド音楽へのいざない」と題したこのコンサートでは、愛知県立芸術大学出身で、アイリッシュフィドルを演奏する小松 大さんと同大在学中で、チェロを演奏す

る長谷川彰子さんのデュオにより、「ダニーボーイ」をはじめとしたアイルランド伝統音楽10曲が演奏されました。思わずステップを踏みたくなるようなフィドル(バイオリン)の軽快な、しかし、どこか物悲しい旋律が、いつまでも心に残るコンサートでした。

2階展示フロア及び3階の回廊部分をほぼ一杯にした約150名の参加者は、二人のすばらしい演奏を楽しんでいました。



コンサートの様子

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年12月16日～平成19年1月15日]

記事	月日	新聞等名
1 改正教育基本法成立：中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授 改正教育基本法で振興計画を立てるのは「政府」であり、どんな省庁も計画に加わることができることを指摘	12.16 (土)	中日 (朝刊)
2 50代のためのライフカレッジ「定年退職後の生き方を考える」：講師 堀内守・本学名誉教授ほか	12.16 (土)	中日 (朝刊)
3 日比裕・本学名誉教授 読売教育賞選考委員に	12.16 (土)	読売
4 名古屋肺ガンフォーラム：下方薫・医学系研究科教授があいさつ 横井香平・同科助教授「肺がんの外科治療」、長谷川好規・医学部附属病院講師「肺がん治療のこれから」と題して講演	12.17 (日)	中日 (朝刊)
5 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 千手観音像の成立 絶大な救済を表現	12.17 (日)	日経 (朝刊)
6 福井康雄・理学研究科教授らは銀河の中心部で水素などの分子がアーチ上に流れる現象を発見	12.17 (日) 12.29 (金)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊)
7 鷲谷威・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教授 東海地震は単独なら想定より小さい地震であると考えられ、東南海、南海との同時発生地震への注意を促す	12.17 (日)	読売
8 年間ベストセラー新書 ノンフィクション9位：速水敏彦・教育発達科学研究科教授『他人を見下す若者たち』	12.17 (日)	中日 (朝刊)
9 16日 文学部内で消火器噴射 出火の形跡は確認されていない	12.17 (日)	中日 (朝刊) 読売
10 高田広章・情報科学研究科教授らのグループとトヨタ自動車が共同で、車載用マルチメディア向けOSを開発	12.18 (月)	日刊工業
11 錫村明生・環境医学研究所教授らのグループは、多発性硬化症の新薬候補物質を開発	12.18 (月)	日経 (朝刊)
12 数理ウェブ：大沢健夫・多元数理科学研究科教授 「iは地球を救うのか？(その2)… ベズーの原理」と題して講演	12.18 (月)	中日 (朝刊)
13 「女子中高生理系進路選択支援事業」の一環として、森郁恵・理学系研究科教授が、「ミクロの世界に住む小さな生き物から動物行動の原理をさぐる」と題して講演	12.18 (月)	中日 (朝刊)
14 医療法人秋桜会非常勤理事・谷一夫氏・本学卒業生が、一宮市長選に立候補	12.18 (月)	朝日 (朝刊)
15 東海スポーツ 17日：テニス東海学生選抜室内選手権決勝記録 男子シングルス 畑亮介さん2-0石井洪平さん・本学学生	12.18 (月)	朝日 (朝刊)
16 「名古屋大学東京フォーラム～ものづくり中部の未来像～」：馬場嘉信・工学研究科教授と國枝秀世・理学研究科教授が、ナノテクノロジーをテーマにそれぞれ研究成果を発信した 企業関係者らが多数参加	12.19 (火) 12.26 (火)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
17 地球水循環研究センター長に上田博・地球水環境センター教授が再任	12.19 (火)	中日 (朝刊)
18 「名古屋大 COE クリスマスレクチャーズ 宇宙と物質の起源・宇宙史の物理学的解説」24日開催	12.19 (火)	中日 (朝刊)
19 第5回読売・大学中部地区懇話会：国立大学の課題は、事務局が政策的な立案などの役割を果たせるかどうか	12.19 (火)	読売
20 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 凶悪犯の手配書 前代未聞の「鬼畜」現る	12.20 (水)	中日 (朝刊)
21 高等教育研究センター長に戸田山和久・情報科学研究科教授が再任	12.20 (水)	中日 (朝刊)
22 叙位叙勲：従四位 後藤重郎・本学名誉教授	12.20 (水)	中日 (朝刊) 読売
23 教育学部附属中 インフルエンザと見られる集団かぜのため1クラス学級閉鎖	12.20 (水)	中日 (朝刊) 他2社
24 3部長人事：留学生センター長に石田幸男・工学研究科教授、工学研究科長に小野木克明・工学研究科教授、多元数理科学研究科長に金銅誠之・多元数理科学研究科教授	12.21 (木)	中日 (朝刊)
25 佐野充・環境学研究科教授らは、高温での耐久性が向上したリチウムイオン電池を開発	12.22 (金)	日経 (朝刊)
26 2010年に日本で開催される国際科学五輪運営委員長である理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授は、五輪により理科だけではなく知そのものへ若者の関心が高まることを期待していると述べる	12.22 (金)	日刊工業
27 朝日カルチャーセンター：「ギジル石窟美術の世界」中川原育子・文学研究科助手、「大宇宙の誕生～『銀河のたまご』からブラックホールの新しい顔まで」福井康雄・理学研究科教授、「東地中海歴史紀行～エーゲ海トルコの遺跡を訪ねる」周遠芳幸・文学研究科教授	12.22 (金) 1.12 (金)	朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
28 大相撲初場所 舛名大 (田中周一さん・本学学生)も番付に載る	12.22 (金)	中日 (朝刊)
29 「神田知事と語る会」21日開催：実行委員会代表・牛房佳貴さん・本学学生らが企画	12.22 (金)	朝日 (朝刊) 読売
30 独立行政法人労働政策研究・研修機構副所長・田丸征克氏・元本学経済学研究科教授が、22日事故死	12.22 (金)	中日 (夕刊)
31 本学法科大学院、発達心理精神科学教育研究センター、地球水循環研究センター、生命農学研究科の事業が文部科学省の「特別教育研究経費」の新事業に認められる	12.23 (土)	中日 (朝刊)
32 本学と連携している名古屋医工連携インキュベータ 入居率100%に	12.23 (土)	日経 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年12月16日～平成19年1月15日]

記事	月日	新聞等名
33 医療法人秋桜会非常勤理事・谷一夫氏・本学卒業生が、一宮市長に当選	12.23 (土) 12.25 (月)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
34 この人：北海道大学低温科学研究所教授・藤原康志・元本学助教 教授「雲科学」を立ち上げる	12.23 (土)	中日 (朝刊)
35 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 如意輪観音の不思議な姿 衆生の救済を思惟	12.24 (日)	中日 (朝刊)
36 医学部附属病院 脳卒中治療成績上位	12.24 (日)	日経 (朝刊)
37 阿部理・環境学研究科助手ら サンゴから海に含まれる二酸化炭素量の変動を調査 地球温暖化の動向把握に期待	12.25 (月)	朝日 (夕刊)
38 国際シンポジウム「アジアの中の日本研究・韓国研究の現在」13日開催：酒井直樹・米国コーネル大学教授の基調講演後、本学研究者らによるパネルディスカッションが行われた	12.26 (火)	中日 (朝刊)
39 本学は、愛知県が建設を目指しているシンクロトロン光を利用した最先端研究施設構想の実現を支援するため、学内に「小型シンクロトロン光研究センター」を来春に設立することを決定した	12.27 (水)	中日 (朝刊)
40 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 盲人学者の写した本 不思議な縁で僧が入手	12.27 (水)	中日 (朝刊)
41 書籍 『地球時代の南北アメリカと日本』二村久則・国際開発研究科教授他編著	12.27 (水)	中日 (朝刊)
42 舛名大 (田中周一さん・本学学生) が平野真一総長を表敬訪問	12.28 (木)	中日 (朝刊) 他3社
43 06年度日本学術振興会賞：「国際関係における歴史教育政策に関する比較研究」で近藤孝弘・教育発達科学研究科助教、 「宇宙マイクロ波背景放射に関する理論的研究」で杉山直・理学研究科教授が受賞	12.28 (木)	日刊工業
44 黒田新一・工学研究科教授と、筑波大学、東北大学のグループは、有機材料を使った電界効果トランジスタ材料に電磁波を発振し、材料からかえってきた信号を測定することにより、材料中の電荷キャリアの性質を解明する新しい方法を開発	12.28 (木)	日刊工業
45 書籍 『いま活断層が危ない 中部の内陸直下型地震』安藤雅孝・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授ら著	12.28 (木) 1. 7 (日)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
46 「大昔の濃尾平野をさぐる」11日開催：糸魚川淳二・本学名誉教授が講演	12.28 (木)	朝日 (夕刊)
47 医学部附属病院が、愛知県から厚生労働省の「地域がん診療連携拠点病院」に推薦された	12.29 (金)	中日 (朝刊)
48 第37回全日本学生将棋団体対抗戦：本学は4位	12.29 (金)	朝日 (朝刊)
49 近藤孝男・理学研究科教授が「生物時計の分子機構に関する研究」で朝日賞を受賞	1. 1 (月)	朝日 (夕刊)
50 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授 日本のあるべき人材は画一的ではなく、そうした人材を作り出す競争だけではない安定性と信頼感を保てるような社会が必要と語る	1. 1 (月)	中日 (朝刊)
51 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 元禄天才少女の漢詩集 大人も驚きの勤勉ぶり	1. 3 (水)	中日 (朝刊)
52 貝淵弘三・医学系研究科教授と田谷真一郎・医学系研究科助手らのグループ 統合失調症に関与している遺伝子「DISC1」が、脳内の情報伝達にかかわるたんぱく質の「適正配置」に重要な役割を果たしていることを解明	1. 4 (木) 1. 5 (金)	朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
53 本学は、文部科学省の06年度新規事業「先導的ITスペシャリスト育成推進プログラム」に選ばれており、産学連携で人材育成に取り組む	1. 5 (金)	日刊工業
54 本学は大学院博士後期課程の学生を対象に返済不要の奨学金の支給を決定 総額1億円	1. 6 (土)	中日 (朝刊)
55 『『高校生防災セミナー』実践発表会・地震防災フォーラム』5日開催：福和伸夫・環境学研究科教授がパネリストとして登壇	1. 6 (土)	中日 (朝刊)
56 お茶の水女子大学学長・郷通子・本学名誉教授が、総合科学技術会議の非常勤議員に任命される	1. 6 (土) 1. 8 (月)	中日 (朝刊) 日刊工業
57 本学は、愛知県知事選の各陣営に、センター試験の英語リスニングに支障が出ないよう、試験当日の会場周辺での街宣活動の自粛を申し入れた	1. 6 (土) 1.10 (水) 1.12 (金)	毎日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
58 中日新聞を読んで：未来から今をみる視点 中西久枝・国際開発研究科教授	1. 7 (日)	中日 (朝刊)
59 医学部附属病院心臓外科手術2005年 155件	1. 7 (日)	読売
60 中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授が教育改革をテーマに講演：改正された教育基本法は、条文はまだ内容が抽象的であり地方や学校が意見を提案していくべきだと語る	1. 8 (月)	中日 (朝刊)
61 袖山卓也氏・本学卒業生 「介護現場に笑いを」モットーに老人ホームの運営に携わる	1. 9 (火)	毎日 (朝刊)
62 第4回キャンパスベンチャーグランプリ中部：「コンパクト広告でインパクト」で吉田力由さん・本学学生ら3人が努力賞を受賞	1. 9 (火)	日刊工業
63 舛名大 (田中周一さん・本学学生) 思い切ってチャレンジしたと角界に入った気持ちを語る	1. 9 (火)	中日 (朝刊)

記事	月日	新聞等名
64 小林さやかさん・本学学生 中日ドラゴンズに今春入団する浅尾拓也さんへの取材の感想	1. 9 (火)	中日 (朝刊)
65 活写！：尾関雄一朗さん・本学学生 オープン前のミッドランドスクエアの最上階より撮影	1. 9 (火)	中日 (朝刊)
66 舛名大 (田中周一さん・本学学生) 今場所一番相撲黒星	1. 9 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
67 鈴木絵里さん・本学学生 ウエディングドレスの試着を体験	1. 9 (火)	中日 (朝刊)
68 学生スタッフ座談会 過去の夢どう変わった？：小林さやかさん・本学学生 子どもの頃の夢の延長にあることをやっていきたいと語る	1. 9 (火)	中日 (朝刊)
69 本学を含む8大学のプロジェクトチーム コンピューター断層撮影装置で複数の臓器を診断できる「多臓器・多疾病診断支援システム」の開発に成功	1. 9 (火)	日刊工業
70 速水敏彦・教育発達科学研究科教授 他人を見下すことで自分を有能だと思ひこむ「仮想的有能感」を持つ若者の分析	1.10 (水)	読売
71 大沢俊彦・生命農学研究科教授と国立長寿医療センター研究所の共同研究で、魚の脂と大豆食品を多く摂取すると認知症の予防になる可能性が分かった	1.10(水)	中日 (夕刊)
72 生命農学研究科と愛知県農業総合試験場が研究協力協定を19日に締結	1.11 (木)	日刊工業
73 公開討論会「知の時代を楽しく生きる」10日開催：理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授、北住炯一・法学研究科教授がパネリストを務めた	1.11(木)	中日 (朝刊)
74 防犯カメラの設置に関する有識者懇話会の委員に、市橋克哉・法学研究科教授が選任された	1.11 (木)	中日 (朝刊)
75 ひと：宮本延春氏・本学卒業生 いじめを受け学校嫌いに 中学時代の成績は「オール1」の高校教師 「絶望の先にも未来はあることに気づいてほしい」と語る	1.11 (木)	毎日 (朝刊)
76 小野耕二・法学研究科教授 愛知県知事選のマニフェストについて、「財政再建のモデルを全国に示すべきだ」と指摘し、「県民から意見を募り改訂版をだして豊かにしてほしい」と提案	1.12 (金)	読売
77 レーザー：理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授 「優れた研究成果を出すには、研究協力が重要」と語る	1.12 (金)	日刊工業
78 「徹底討論 次の東海地震はどこだ!？」12日開催：次の東海地震は、東海・東南海地震と連動型になるとの意見で一致	1.13 (土)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
79 「第9回1.17震災フォーラム 阪神大震災を私たちの街で繰り返さないために」が開催：田中重好・環境学研究科教授が講演	1.14 (日)	中日 (朝刊)
80 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 インド古典様式の仏像 肉体と精神、見事に調和	1.14 (日)	中日 (朝刊)
81 医学部附属病院 未破裂脳動脈瘤治療の上位病院に選ばれる：課程評価B 構造評価A 治療成績評価A	1.14 (日)	日経 (朝刊)
82 高橋隆・医学系研究科教授らが設立したベンチャーであるオンコミクスが、肺がんの転移・再発を予測する検査を事業化	1.15 (月)	日刊工業
83 教育講演会「語り合おう教育と学校」27日開催：佐々木亨・本学名誉教授が「定時制高校とは何かをテーマに講演を行う	1.15 (月)	中日 (朝刊)
84 応用物理学会東海支部創立40周年記念「リフレッシュ理科教室」14日本学にて開催：小学生ら約2千人が参加	1.15 (月)	中日 (朝刊)
85 小川正持氏・本学卒業生が最高裁判事局長兼図書館長に任命される	1.15 (月)	中日 (朝刊)

INFORMATION

平成18年度定年退職教授等の最終講義日程表

下記の情報は、1月29日現在のものです。詳細な情報については、問い合わせ先にご確認ください。

所属	氏名	職名	月日	時間	場所	講義題目	問い合わせ先
文学研究科	竹内 弘行	教授	1月17日(水)	13:00～14:30	237講義室	温故知新－中国近代思想史研究30年－	吉田 純教授 (052-789-2214)
教育発達科学研究科	高木 靖文	教授	2月23日(金)	14:00～16:00	大講義室	藩費史攀躋の四〇年	庶務掛 (052-789-2602)
	蔭山 英順	教授	2月21日(水)	14:00～16:00	大講義室	私の心理臨床を育ててくれたクライアント	庶務掛 (052-789-2602)
法学研究科	北住 炯一	教授	3月9日(金)	15:00～17:30	第3講義室	ドイツ連邦主義と共生世界	増田知子教授 (052-789-2344)
経済学研究科	和合 肇	教授	2月8日(木)	13:00～14:00	第3講義室	ベイズ計量経済分析の最近の発展	庶務掛 (052-789-4920)
工学研究科	原口 紘丞	教授	3月15日(木)	14:00～16:00	1号館2階 121講義室	メタロミクス：生命と金属の世界	梅村知也助教授 (052-789-5288)
	松井 正顯	教授	2月28日(水)	15:30～17:30	1号館2階 121講義室	磁性探求と応用をめざして	鳥本 司教授 (052-789-4614)

所 属	氏 名	職 名	月 日	時 間	場 所	講義題目	問い合わせ先
工学研究科	高村 秀一	教授	3月12日(月)	15:00~16:00	IB電子情報館中棟1階IB015講義室	プラズマと核融合の研究40年 -多くの学生・研究者・科学者との出会い-	飯田孝夫教授 (052-789-3781)
	野村 宏之	教授	3月2日(金)	15:00~16:30	4号館中央棟3階講義室	40年の大学生活を振り返って -鋳造、凝固の研究を楽しむ-	平澤政廣教授 (052-789-5309)
	浅井 滋生	教授	2月27日(火)	15:00~16:30	4号館中央棟3階講義室	魅せられて 磁場と戯れ 夢半ば	平澤政廣教授 (052-789-5309)
	澤田 義博	教授	3月16日(金)	15:00~16:30	1号館2階121講義室	名大10年を振り返って-振動問題とのかかわり-	野田利弘助教 (052-789-3833)
	武田 邦彦	教授	2月27日(火)	13:00~14:30	4号館中央棟4階大会議室	真理は現場に聞け	棚橋 満助手 (052-789-3613)
	三矢 保永	教授	3月13日(火)	15:00~16:30	2号館南館4階241講義室	私の人生、一二の三	新美友秀教授 (052-789-2791)
	田中 啓介	教授	3月9日(金)	15:30~17:00	2号館南館4階241講義室	材料構造信頼性の基盤を求めて	山下博史教授 (052-789-4470)
生命農学研究科	平嶋 義彦	教授	2月6日(火)	13:30~14:20	第12講義室	40年間の研究活動をふりかえって	庶務掛 (052-789-5266)
医学系研究科	森 尚義	教授	3月19日(月)	16:00~17:00	基礎医学研究棟第4講義室	免疫組織化学を中心とした悪性リンパ腫研究	総務課総務第一掛 (052-744-2423)
	下方 薫	教授	3月16日(金)	16:00~17:00	基礎医学研究棟第4講義室	紆余曲折の多かった大学生活を顧みて	総務課総務第一掛 (052-744-2423)
	二村 雄次	教授	3月1日(木)	16:00~17:00	基礎医学研究棟第4講義室	胆道外科の変遷	総務課総務第一掛 (052-744-2423)
	豊嶋 英明	教授	3月6日(火)	15:00~16:00	基礎医学研究棟第4講義室	歩んだ跡	総務課総務第一掛 (052-744-2423)
	山内 一信	教授	3月8日(木)	15:00~16:30	基礎医学研究棟第4講義室	私の医療情報学・病院管理学の25年	総務課総務第一掛 (052-744-2423)
	井口 昭久	教授	3月9日(金)	15:00~16:00	基礎医学研究棟第4講義室	今までとこれからの老年医学	総務課総務第一掛 (052-744-2423)
	菊池 韶彦	教授	2月22日(木)	15:00~16:00	基礎医学研究棟第4講義室	医真菌と10年半	総務課総務第一掛 (052-744-2423)
医学部附属病院	鍋島 俊隆	教授	3月17日(土)	16:00~17:00	附属病院中央診療棟3階講堂	医薬品適正使用における薬剤師の役割	総務課総務第一掛 (052-744-2423)
医学部保健学科	杉村 公也	教授	2月27日(火)	15:00~16:00	保健学科東館大講義室	老年認知症のリハビリテーションについて考える	総務課総務第三掛 (052-719-1504)
国際開発研究科	安田 信之	教授	1月30日(火)	16:30~18:00	第1会議室	アジア法研究の方法と開発法学 -アジア法研究の40年-	事務掛 (052-789-4953)
	江崎 光男	教授	1月29日(月)	15:00~16:30	多目的オーデトリウム	GSIDの16年、開発途上国研究の38年	事務掛 (052-789-4953)
多元数理科学研究科	佐藤 肇	教授	3月16日(金)	15:00~16:00	理1号館509号室	おもしろくて難しい幾何	事務室 (052-789-2823)
	土屋 昭博	教授	3月16日(金)	16:15~17:15	理1号館509号室	彷徨える私の研究遍歴	事務室 (052-789-2823)
国際言語文化研究科	中嶋 忠宏	教授	2月9日(金)	14:20~15:00	3階大会議室	言葉ではない言葉を求めて	鈴木繁夫教授 (052-789-4791)
	安藤 重治	教授	2月9日(金)	13:40~14:20	3階大会議室	テキストとコンテキスト：『ユートピア』の読み方	鈴木繁夫教授 (052-789-4791)
	有川貴太郎	教授	2月9日(金)	13:00~13:40	3階大会議室	ラーオコオン像の世界	鈴木繁夫教授 (052-789-4791)
	近藤 健二	教授	1月31日(水)	10:30~11:15	教養教育院第1会議室	音訓の向こうに見えるもの-先史言語学事始め-	研究科長室 (052-789-4582)
	吉田 正也	教授	1月31日(水)	11:15~12:00	教養教育院第1会議室	報道と記者の使命	吉田正也教授 (052-789-4337)
環境学研究科	松本 英二	教授	3月15日(木)	15:00~17:30	環境総合館レクチャーホール	過去を紐解く	庶務掛 (052-789-3454)
	上田 豊	教授	3月15日(木)	15:00~17:30	環境総合館レクチャーホール	氷河の山旅	庶務掛 (052-789-3454)
	小澤 智生	教授	3月2日(金)	16:00~17:30	野依学術交流館1階会議室	見果てぬ夢 -一系統進化の研究とともに-	庶務掛 (052-789-3454)
情報科学研究科	三井 斌友	教授	3月2日(金)	15:00~16:30	情報科学研究科第1講義室	数値解析 これまで・これから -40年間を顧みて-	庶務掛 (052-789-4716)
アイソトープ総合センター	西澤 邦秀	教授	3月15日(木)	15:00~17:30	環境総合館レクチャーホール	放射線安全研究と社会との関わり	環境学研究科庶務掛 (052-789-3454)
エコトピア科学研究所	伊藤 秀章	教授	3月17日(土)	14:30~16:00	メルパルク名古屋3階カトリアの間	材料化学からエコトピア科学への旅	吉田寿雄助教 (052-789-5851)
太陽地球環境研究所	上出 洋介	教授	3月14日(水)	16:00~17:00	野依記念学術交流館カンファレンスホール	地球磁場変動で宇宙空間を診る	菊池 崇教授 (052-788-6338)

※1 定年1年前の退職者です。

※2 退職記念事業(会費徴収)の記念講演会を最終講義とします。

※1

※2

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
1月23日(火)～2月24日(土) 場 所：博物館展示室 時 間：10時00分～16時00分 休 館 日：日・月曜日 入 場 料：無料 [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	第10回名古屋大学博物館企画展 「名大キャンパスの野鳥」
2月17日(土)、3月3日(土)、17日(土) 場 所：経済学部カンファレンスホール 時 間：10時00分～12時00分 [問い合わせ先] 経済学部・経済学研究科 エクステンションサービス	オープンカレッジ・自由奔放！サイエンス 講演題目：「大気化学と地球環境問題」(2/17) 講 演 者：松見 豊 (太陽地球環境研究所教授) 講演題目：「ナノテクノロジーのあり方を考える「お札」は「お金」だろうか」(3/3) 講 演 者：黒田光太郎 (工学研究科教授) 講演題目：「神と人間のドラマ：旧約聖書を描いた絵画を読む」(3/17) 講 演 者：木俣元一 (文学研究科教授)
2月19日(月) 場 所：文系総合館7階オープンホール 時 間：16時00分～18時00分 [問い合わせ先] 高等教育研究センター 夏目達也教授 052-789-5693	第36回客員教授セミナー 講演題目：「大学院教育の質向上に向けて」 講 演 者：ジェラルドWフライ (ミネソタ大学教授)
2月20日(火) 場 所：環境総合館1階レクチャーホール 時 間：17時30分～19時00分 参 加 費：無料 [問い合わせ先] 災害対策室 052-788-6038	第27回防災アカデミー 講演題目：「スマトラ津波が人々を襲った衝撃ー津波の挙動と土地条件ー」 講 演 者：海津正倫 (環境学研究科教授)
2月26日(月) 場 所：共同教育研究施設2号館8階 801会議室 時 間：9時00分～17時00分 [問い合わせ先] エコトピア科学研究所 長谷川達也教授 052-789-4506	バイオウエイストのリファイナリー型資源化ワークショップ 内 容：バイオウエイストのリファイナリー型資源化に関する日本、韓国、中国、インドネシアの研究
3月1日(木)～2日(金) 場 所：野依記念学術交流館 カンファレンスホール 時 間：13時00分～17時30分 (3/1) 9時00分～12時00分 (3/2) [問い合わせ先] 理学研究科 町田泰則教授 052-789-2502	21世紀 COE プログラム「システム生命科学：分子シグナル系の統合」 公開シンポジウム『ゲノムから何が見えるか?』 内 容：様々な生物を、「ゲノム」という視点から解明する 講 演 者：黒岩常祥 (立教大学理学部生命理学科教授)、佐々木卓治 (農業生物資源研究所理事)、田畑哲之 (かずさ DNA 研究所副所長)、森 浩 貞 (奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科教授)、藤山秋佐夫 (国立情報学研究所教授)、小原雄治 (国立遺伝学研究所所長)、榎 佳之 (理化学研究所ゲノム科学総合研究センター長)
3月1日(木)～3月15日(木) 場 所：博物館展示室 時 間：10時00分～16時00分 休 館 日：日・月曜日 入 場 料：無料 [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	IODP (統合国際深海掘削計画) キャンペーン 大学生向け講演会 (3/2) 場 所：博物館講義室 時 間：13時00分～15時30分 講演題目：「IODP 乗船研究のお誘い」 講 演 者：須藤 斎 (環境学研究科助手) 講演題目：「研究者の IODP への貢献と期待」 講 演 者：渡辺俊樹 (環境学研究科助教授) 入 場 料：無料 子ども・一般向け講演会 (3/3) 場 所：博物館講義室 時 間：13時00分～14時20分 講演題目：「「ちきゅう」って大きいの？」 講 演 者：長谷部喜八氏 (CDEX)

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月3日(土)

時間：14時30分～16時00分
場所：博物館講義室
参加費：実費（材料代）

砂絵体験教室「マンツルの宝石で砂絵をつくろう」

講演者：西本昌司氏（名古屋市科学館）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

3月4日(日)

場所：IB 電子情報館
時間：9時30分～17時00分

防災フェスタ in 名古屋大学

プログラム：参加体験型の防災展示・企画、シンポジウム、
地域防災力向上シミュレータ利用講習会 など

[問い合わせ先]

応用地質中部支部
大川哲志 052-793-8321

3月10日(土)

場所：IB 電子情報館
時間：10時00分～17時40分

大学教育改革フォーラム in 東海2007

[問い合わせ先]

高等教育研究センター
夏目達也教授 052-789-5693

3月10日(土)

場所：名古屋国際センター別棟ホール
時間：13時00分～16時30分

小中学校教員・日本語ボランティア研修会

講演題目：「移動する子どもたち」の言語教育をどう支えるか
講演者：川上郁雄（早稲田大学教授）

[問い合わせ先]

留学生センター
浮葉正親助教授 052-789-5771

3月17日(土)

場所：環境総合館1階レクチャーホール
時間：13時00分～17時00分
入場料：無料
先着100名

シンポジウム 津波「その衝撃と全貌」

プログラム：
13時00分～13時10分 開会のあいさつ
13時10分～15時10分 基調講演
15時10分～15時30分 休憩
15時30分～17時00分 パネルディスカッション

[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038



名大トピックス No.164 平成19年2月16日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

留学生と日本人学生が共同生活を営む、国際喫煙館（平成19年1月22日）



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ（<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>）でもご覧いただけます。

58 医学部附属病院分院（東門前町時代）

本学の医学部附属病院分院については、本連載第12回（No.119）で「東新町時代」について触れました。今回は、「東新町時代」に続く「東門前町時代」について取り上げます。

東門前町時代の分院（写真1）は、1961（昭和36）年5月に、市内中区新栄町三丁目（現在の中区栄四丁目）にあった旧分院（陸田ビル、写真2）から直線距離で約200m北側の土地に建設されました。『名古屋大学学報』（創刊号、1961年11月1日付）には、名古屋市都市計画の一部として市内東区東門前町二丁目（現在の東区東桜二丁目）に建築中であった新しい分院建物が同年5月に完成し、同年9月下旬から新建物での業務が開始されたとの記事が掲載されています。

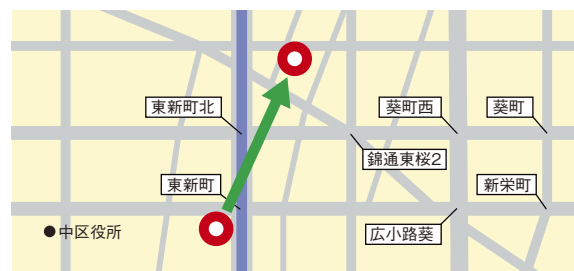
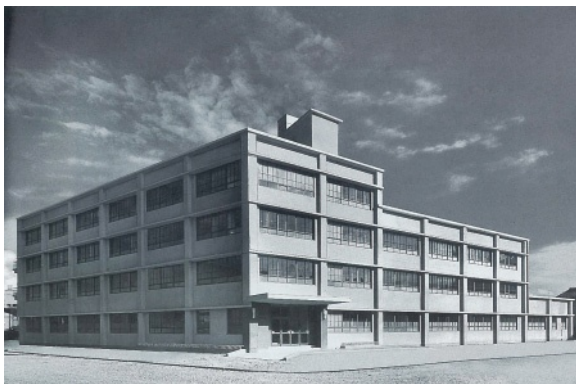
新しい分院は、鉄筋コンクリート地下一階・地上四階建て（延べ3,089㎡）の規模で、旧分院より700㎡ほど狭い施設でした。この点について当時の分院長は、新築移転に際して床面積が減少したことで「診療その他に色々と不便であることは申すまでもない」と述べています。

こうした不便を承知の上で分院移転を実施した背景に

は、当時の文部省内に分院の廃止を求める意見があったようです。しかし戦前期に陸田志よう氏からの個人寄附を受けた旧分院は、戦後も本学医学部の第二臨床病院としての役割を担うことで一般市民や警察・消防関係からも期待を寄せられていました。そこで本学としては、旧分院の近くで国費によらない移転を模索して名古屋市との折衝を重ねた結果、実現した分院移転だったのでした。

1961年11月14日、分院の移転披露式が分院中庭を会場に120名の出席者を得て開催されました。同披露式では、約18年間にわたって地域医療に貢献した旧分院建物を記念して、その寄附者である陸田氏に旧分院建物の石膏模型が贈呈されました（No.119参照）。これに対して、翌1962年10月には陸田直行氏から、新築移転を記念して新分院の敷地内に噴水の設置寄附がありました。写真3は、陸田氏からの噴水寄附を記念して、新分院の玄関前に掲げられていた銘板です。

この後、分院は1979年に東区大幸一丁目に移転し、1996年5月に本院に統合されるまでの「大幸町時代」を迎えます。



- | | | |
|---|---|------------------------------------------------|
| 1 | 3 | 1 東門前町に開院当時の建物
（『名古屋大学医学部附属病院分院記念誌』1997年より） |
| 2 | | 2 東新町時代の分院（陸田ビル）外観（同上） |
| | | 3 分院玄関前に掲げられていた銘板 |